

地域ブランドを原動力とした 魅力あるまちづくり



なかがわ まさる
中川 勝

よねざわ
米沢市長(山形県)



おがさわら はるいち
小笠原 春一

のほりべつ
登別市長(北海道)



登別市



米沢市

龍ヶ崎市

宇治市

司会・コーディネーター

ほその すけひろ
細野 助博

中央大学名誉教授



まつむら あつこ
松村 淳子

うじ
宇治市長(京都府)



はぎわら いさむ
萩原 勇

りゅうがさき
龍ヶ崎市長(茨城県)



※新型コロナウイルス感染症の感染防止に配慮し開催しています

り方などについて幅広くお話しいただきました。(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

人口減少、地域経済の低迷が進む中で、地域の活力を創造していくためには、地域イメージの向上を図り、ヒト・モノ・カネを地域に呼び込む必要があります。その手段として、地域の中にある各種資源を「地域ブランド」として発掘し、磨き上げるとともに、それらを内外に発信することにより、地域経済の活性化や観光振興、市の認知度向上、シビックプライドの醸成などにつなげる取り組みが各地で展開されています。

座談会では、地域ブランドを原動力とした魅力あるまちづくりを進めている小笠原・登別市長、中川・米沢市長、萩原・龍ヶ崎市長、松村・宇治市長にお集まりいただき、これまでの活動内容、市民の協力や若い世代への働き掛けの必要性、効果的な支援の在り方などについて幅広くお話しいただきました。



観光地として
発展し続けるためにも
広域観光に取り組み
若い観光客への働き掛けも
進めていきたいですね。

小笠原 春一
登別市長(北海道)

地域資源を磨き上げ、
まちの付加価値を高める

細野 コロナ下でも東京圏への人口の一極集中に歯止めがかからず、また全国的に人口減少が加速する中、地域活性化を目指して住民やさまざまな主体と連携して、地域独自の資源を掘り起こし、付加価値の高い製品やサービスに磨き上げていく地域ブランドの取り組みが、多くの

自治体で進められ効果を上げています。それでは、各都市のこれまでの取り組み内容についてお話しください。

小笠原 市長になると、本日のように東京に出張する機会が多くあります。私は平成20年に市長に就任しましたが、その時に感じたのが、出張の際にお持ちする登別自慢のお土産が見当たらない、ということでした。そこで、平成21年に市内の関係機関を集めて、「登別ブランド推進協議会」を設立し、地域資源を活用した地元産製品の中から、特に優れたものを「登別ブランド推奨品」として認定する事業を始めました。認定に当たっては、食やマーケティング、流通に関する専門家もメンバーに加えた「登別ブランド推奨審査会」において厳しい審査が行われます。これを受けて、登別ブランド推進協議会では登別ブランド推奨品の認定を進めており、その数は現在、34製品に及びます。

また、この認定制度が軌道に乗った段階で、新たな地元産品の掘り起こしとして取り組んだのが、市独自のご当地グルメの開発でした。市内の飲食店の有志が中心となり、食の専門家のアドバイスを受けながら、研究や試作を重ね、平成27年に「登別閻魔やしそば」が誕生しました。「北海道産小麦の平麺を使い」「閻魔大王指定の秘密のタレを使い」「登別産または登別近郊の食材を使い」という三つの掟を守れば、各店舗で自由にアレンジを加えることができるのが特徴で、現在、市内25店舗で提供しています。これまでに市外でのグルメイベントを含め、累計提供数は43万食を超えています。

中川 米沢市は江戸時代には上杉氏(米沢藩)の城下町として発展した歴史ある都市です。ま

た、Apple(館山りんご)、Beef(米沢牛)、Carp(米沢鯉)の頭文字を取った「米沢の味ABC」をはじめ、豊かな食資源に恵まれていることに加え、山形県内でトップの製造品出荷額を誇る、ものづくりのまちでもあります。とはいえ、人口減少が進む中で、持続可能な地域づくりを進めるためには、もう一度、地域が一丸となって各種資源を磨き上げる必要があると考えました。そのような観点から米沢市では、産品だけでなく、サービス・観光・文化・行政など、さまざまな領域で「挑戦と創造」を喚起し、地域全体の付加価値を高めることを目的に「米沢ブランド戦略」を平成29年に打ち立てました。以来、この戦略に基づき、各領域において「米沢品質」を持続的に向上させる「米沢品質向上運動」を推



閻魔大王からの掟

- ①北海道産小麦を使用したモチモチの平麺を使い!
- ②閻魔大王指定の秘密のタレを使い!
- ③登別産または登別近郊の食材を使い!

市内の飲食店有志を中心にご当地グルメ「登別閻魔やしそば」を開発(登別市)

地域ブランドの推進に向けて大事なことは効果的なストーリーを練り上げ内外に提示することにあると思います。



中川 勝
米沢市長(山形県)

進んでいます。実際に運動を進めるプレーヤーが集う「TEAM NEXT YONZAWA (TNY)」には現在196の企業・団体が登録をしています。同時に、令和元年度からは、特に秀でた米沢品質を有する商品やサービスを顕彰する「米沢品質AWARD」もスタートし、これまでに9件が認定を受けています。

萩原 龍ヶ崎市を含む茨城県は、日本有数の農業県です。大消費地である首都圏に近接した地

の利を生かして、農産物出荷額は全国3位を誇ります。その中で龍ヶ崎市は「龍ヶ崎トマト」と「小菊」が茨城県の銘柄産地に指定され、競争力のある産地の育成を進めています。また、平成26年に市が創設した「ふるさと龍ヶ崎ブランド農産物認定制度」において、龍ヶ崎トマトと特別栽培米コシヒカリを認定し、地産地消の推進および販路拡大に努めています。さらに、これらブランド農産物の認知度向上を目指して、料理研究家や野菜ソムリエなど、市が委嘱した「龍ヶ崎市食と農のアンバサダー」を中心に、効果的なブランディングやレシピの研究などを進めており、SNSや広報誌で積極的にPRしています。

さらに、平成30年には、龍ヶ崎市観光物産協会が独自のブランド「プティアキュー(Petit Accueil... ぷちやかなおもてなし)龍ヶ崎」を立ち上げ、地元産の農産物を使用した13商品(現在、販売は11商品)を認証し、市観光物産センターなどで販売をしています。そのほか、龍ヶ崎市商工会の女性部有志によるオリジナルコロッケの販売をきっかけに、平成15年に市内でコロッケを扱う店舗が「コロッケクラブ龍ヶ崎」を結成し、コロッケによるまちおこしも進めています。

松村 宇治市を含む京都府山城地域は、約800年の歴史を誇る「宇治茶」の産地です。中でも宇治市は、茶園に覆いを掛けて日光を遮る「覆下栽培おおいした」をはじめ、昔ながらの農法で高級茶を生産する茶どころとして知られています。

宇治市で特にお茶の関連施設が集積しているのは、宇治川周辺の「中宇治」エリアです。歴史ある茶商や茶問屋、茶工場などが連なり、趣の



新たな地域ブランド産品として幅広く活用が検討されている「紅花」(米沢市)

ある都市空間を形作っています。平成21年には、宇治茶の伝統的な生業なまわいの風景が息づく景観地として、この中宇治エリアを含む228.5haが都市域では初めて「重要文化的景観」に選定されました。

以来、宇治市としても市の「観光振興計画」のコンセプトに「宇治茶に染める観光まちづくり」を掲げて、宇治茶を活用した観光戦略を進めたり、平成26年には「宇治茶の普及とおもてなしの心の醸成に関する条例」を制定し、宇治茶を使ったご当地グルメの開発に取り組みなど、地域ブランドである宇治茶を広くまちづくりに生かしてきました。

一方で、山城地域における観光の入り口である宇治市内には山城地域のDMO組織「一般社



龍ヶ崎トマトと
特別栽培米コシヒカリを
ブランド認定し
地産地消の推進および
販路拡大に努めています。

萩原 勇
龍ヶ崎市長(茨城県)

団法人京都山城地域振興社」が立地。地域一丸となって、宇治茶を核とした広域観光の推進に取り組んでいるほか、平成30年度に京都府により創設された「プレミアム宇治茶認証制度」の下で、宇治茶のブランド力向上と販売力強化に努めています。

求められる、若い世代への働き掛け

細野 地域ブランドの取り組みが強力かつ、継

続的に推進されるためには、市民の協力も重要になってくると思います。この点についてはいかがでしょうか。

中川 まちづくりや地域ブランドで一番大切なことは、市民一人一人の意識だと思います。市民が自分たちの地域資源の素晴らしさを認識しているか。認識していなければ、行政がいかに気付きのきっかけを与え、啓発していくか。そのような観点から、米沢市では市民中心の運動体として、地域ブランドの取り組みを進めてきました。まちの持続可能性という点を考えると、特に若い世代への働き掛けが欠かせないと考えています。

萩原 私も若い世代へのアプローチは非常に大切だと考えています。茨城県は全国有数の農業県であることに加え、エネルギーや水資源にも恵まれるなど、さまざまな魅力にあふれた地域です。しかし、それがどうも住民の皆さん、特に若い世代に伝わっていません。「茨城県で自慢できるものは？」と聞かれても「特別なものは何もありません」と答えてしまう方も多いようです。

実際、「都道府県魅力度ランキング」などの結果を見ても、茨城県は下位に低迷しています。詳細の項目を見ますと「愛着度」や「自慢度」の数値が低いと聞いており、茨城県の県民性として、まちの魅力が実際に頭の中にインプットされていないことも原因の一つと考えられます。その対策として、地域の大人たちが若い世代の皆さんとしっかりと関わり、まちの魅力を地道に伝えていくことが重要だと考えています。

松村 宇治市では公立の小学校3年生から中学校3年生を対象に、総合的な学習の時間を「宇



地域の独自ブランド「プティ アクウコ龍ヶ崎」に認証された各種商品(龍ヶ崎市)

治学」と称して、市の文化や伝統に対して理解を深める探究学習を進めています。地元の大学と連携して、副読本も作成しました。まずはこの宇治学を通じて、自分たちのまちのことをよく学び、それを土台に、「大人になっても宇治市に住み続けたい」「地域社会の一員として、まちをよりよいものにしていきたい」と考える児童生徒が一人でも増えればと考えています。

中川 米沢市は全国から学生が集まる学園都市です。米沢市で生まれ育った子どもたちはもちろんですが、縁あって市内に進学された学生さんには、ぜひ卒業後もこの地に定着してもらいたい。そのためにも、地域の中でしっかりとつながりを確保するために、学生さんたちのネットワークづくりにも力を入れてきました。

昔ながらの農法で行う
茶づくりへの支援として
京都府とも連携し
技術の継承や担い手の
育成を進めています。



松村 淳子
宇治市長(京都府)

事実、学生さんもさまざまな形で、地域活動に取り組んでいます。

昨年は米沢市も対象地域に入っている「最上川流域の紅花システム」の世界農業遺産への申請が行われました。今年中の認定を強く期待しているところですが、米沢市としても紅花を活用した商品開発に力を入れていくつもりです。ぜひ、多くの学生さんがそこに参画できる仕組みもつくっていきたくと考えています。

小笠原 登別市でも、包括連携協定を結んだ学

校法人片柳学園が有する市内の日本工学院北海道専門学校や室蘭工業大学と連携して、まちづくりに関する取り組みを進めています。さらに、SNSを活用して地域の食の情報などを発信する取り組みなども行っています。

地域ブランドを生かした観光振興へ

松村 子どもたちへの取り組みとしては、ほかにもお茶の関連施設が集まる中宇治エリアをモデルに、「子育てにやさしいまち」の実現を目指した官学連携の取り組みも進めています。子どもたちが日常生活の中で利用する広場や公園、緑地、空き地、路地などの公共空間を、子どもたちの目線で再発見する取り組みです。地元の大学や学生さんたちとも連携を図りながら、子どもたちに中宇治エリアの環境や宇治茶への関心を高めてもらう機会にしたいと考えています。

萩原 龍ヶ崎市でも、「10年後に私たちが住みたい龍ヶ崎とは」を主題に、高校生から政策を提案してもらう「龍ヶ崎のみらい創生 高校生政策アイデアコンテスト」を先日、オンラインで開催しましたが、市内の牛久沼を一周できるサイクリングロードの実現など、熱意あふれる素晴らしいアイデアが寄せられました。こうした機会をぜひ増やしたいですね。

小笠原 登別市は日本有数の温泉地でもあり、ですので、持続的に発展する観光地を目指して、若い観光客への働き掛けを進めていきたいと考えています。幸い、登別市の周辺には、日本遺産「炭鉄港」に認定された室蘭市の各種施設、白老町に整備された「国立アイヌ民族博物館」などの観光資源も豊富にありますし、来年はアドベンチャーリズムに関する世界的なイベント



茶園に覆いを掛けて日光を遮る「覆下栽培」で高品質な宇治茶を生産(宇治市)

ト「アドベンチャー・トラベル・ワールド・サミット2023」も北海道内で開催されます。ぜひ、こうした周辺の観光スポットや大規模イベントと連携した広域観光にも取り組んでいきたいと思えます。

中川 私もこれからのまちの発展において、観光振興やインバウンドの促進は非常に大切だと考えています。米沢市は都会に比べて便利な観光地とはいえません。しかし、かつてアメリカ元駐日大使エドウィン・O・ライシャワー氏が、山形県を「山の向こうのもう一つの日本」と称したように、この地には自然と人間の結び付きを大事にしてきた独自の精神文化が息づいています。世界でさまざまな問題が起きている中、こうした精神文化を世界中の若い人たちに積極的

に発信し、地域活性化につなげていきたい。その一環として、まずは米沢駅にコワーキングスペースを整備したり、DMOの設立などに取り組んでいるところです。

地域ブランド振興に向けた行政の支援策

細野 最後に、地域ブランドの振興に向けて、行政としてどのような支援を行っているのか、今後の目標を含めてお聞かせください。

松村 宇治市の茶園では「覆下栽培」に象徴されるように、昔ながらの農法で茶づくりをしています。毎年、5月に入ると人の手で茶摘みを行い、玉露の生産には伝統的な「手もみ」が今も行われています。上質な宇治茶づくりには、当然コストがかかりますし、技術の継承も必要になります。そこで、宇治市ではブランド育成のために各種補助を行うとともに、京都府の「茶業研究所」と連携して、技術の継承や担い手の育成・確保を進めています。

萩原 龍ヶ崎市も農業への支援は手厚く行っていますが、今後、取り組みたいと考えているのは全て龍ヶ崎市産の食材を使った学校給食の提供です。実は以前から学校給食における地産地



細野 助博
中央大学名誉教授

消の取り組みを進めてきましたが、できれば龍ヶ崎市産100%の食材を用いた、おいしい学校給食を提供していきたいと考えています。併せて、その機会に生産者や地域ブランドの関係者と子どもたちとの交流も進めるなど、学校給食を通じた地域理解の促進も継続し、子どもたちの農業への関心を深めていければと考えています。

小笠原 酪農が盛んな登別市は、学校給食に地元産の牛乳を提供しています。単価は高いですが、味がよいと子どもたちにも好評です。また、登別市は、たらのを中心とした水産加工食品の生産も盛んなため、子どもたちには地元産を学ぶ機会として、たらの着色やパック詰め作業の体験学習も行っています。

また、こうした予算を伴う事業のほかにも、役所のマンパワーを生かした支援も時折、行っています。例えば、市内では地元産ホップを使用した本格的なビールが生産が行われているのですが、収穫期になると市の職員がホップ畑を訪れて手摘み作業を手伝う場合もありますよ。

中川 米沢市でもブランド力の向上を目的に、生産者へ必要な補助などを行っています。行政に求められていることは、こうした補助金や助成金の支給ばかりではありません。私はむしろ、地域ブランドの推進に向けて最も大事なことは、効果的なストーリーを練り上げ、内外に提示することにあると考えています。そうした思いから、米沢市ブランド戦略においても単にブランド認証の仕組みをつくるだけでなく、ブランドコンセプトやスローガンなどを明確にし、まち全体で取り組みを進める仕組みを考えました。今後は紅花を生かした産業活性化のス

トリーづくりにも取り組みたいですね。

細野 地域ブランドとはものづくりと考えられがちですが、中川市長がおっしゃったようにストーリーづくりが極めて重要です。地域内外の人たちの心を一つにするようなストーリーが、高付加価値なものづくりや販路拡大につながっていくのだと思います。今後とも地域ブランドの発展を通じて、地域の活力を高め、自分たちのまちに誇りを持てるようなまちづくりを丸ごと進めたいと思います。本日はありがとうございました。

(令和4年6月1日、全国都市会館にて開催)

本コーナーは隔月掲載となります。次回は9月号に掲載予定です。

